

安野さんの『はじめてであう すうがくの絵本』など

亀井哲治郎（亀書房）

2006 年度の日本数学会出版賞を受賞された安野光雅さんの代表的な著作について紹介するように、とのご依頼です。

私は『数学セミナー』編集部時代の 1978 年 3 月号に「算私語録」という原稿をいただいて以来、『科学朝日』や『数学のたのしみ』も含めて 30 年近くにわたり、安野さんの連載を手がけてきました（『科学朝日』の場合は社外の編集者として）。それらは『算私語録』3 冊、『散語拾語』、『村の広場』として単行本にまとめられています（いずれも朝日新聞社刊）。

これらは数学雑誌や科学雑誌に載せることを意識しつつ、数学のことから旅行の見聞まで、新聞の切抜きからパズルまで、芸術論から教育論まで、折に触れて綴られた極めて短いエッセイ（ショートショート）の集成です。安野さんの個性的な筆致を通して語られるさまざまなことからの、予期せぬ面白さもさることながら、じっくり味わえば味わうほど、私たちが自由な連想の世界へと誘い出してくれる、それが大きな魅力だと思います。

（『数学のたのしみ』誌上では、続編の連載「村の広場の午後」が続けられていますので、併せてお読みください。）

ところで、私も若い頃からの熱烈な「安野ファン」で、かなりの数の本を集めています。残念ながらすべてではありませんが、それでも我が家の小さな本棚 1 つを占領しています。その膨大な著作を勝手に分類して、それぞれどんな本があるか、思い付くままに挙げてみましょう。

A：数学・科学に題材をとった絵本 『ふしぎなえ』、『さかさま』、『はじめてであう すうがくの絵本』、『天動説の絵本』、『10 人のゆかいなひっこし』、『ふしぎなたね』、『壺の中』、『魔法使いの ABC』、『魔法使いのあいうえお』など。

B：それ以外の絵本 『旅の絵本』シリーズ、『ABC の本』、『あいうえおの本』など。

C：画集 『安野光雅の画集』、『画集 平家物語』、『オランダの花』、『イタリアの丘』、『ドイツの森』、『津和野』、など。

D：入門書 『わが友 石頭計算機』（のちに『石頭コンピューター』）、『集合』など。

E: エッセイ, 対談 『すうがく博物誌』, 『対談 数学大明神』, 『空想工房』, 『安野光雅・文集』(全6巻), 『算私語録』, 『散語拾語』, 『村の広場』, など.

F: その他 『昔咄 きりがみ桃太郎』, 『きりがみ 江戸いろは』 など.

数学ということではA群, D群, E群の本ですが, どれをとっても, 発想や視点のみずみずしさ, ユニークさ, 意外さ, 絵の美しさ, 優しさ, 温かさがたっぷりと溢れています.

その中から敢えて1つ, と考えたすえ, 『はじめてであう すうがくの絵本』(全3巻; 福音館書店) をご紹介したいと思います.

本書は次の13章から構成されています:

第1巻: なかまはずれ / ふしぎなのり / じゅんばん / せいくらべ

第2巻: ふしぎなきかい / くらべてかんがえる / てんてん..... / かずのたんご
みずをかぞえる

第3巻: まほうのくすり / きれいなさんかく / まよいみち / ひだりとみぎ

主な読者対象として, 表紙に「4才からおとなまで」と書かれているので, 本書でいう「はじめてであう」は, 4歳くらいの幼児から小学生くらいの子供たちが, 初めて数学的な事実や概念と出会う, という意味であろうと考えられます.

たとえば第1巻の第1章「なかまはずれ」は集合がテーマです. いわゆる「数学教育の現代化」のとき, 集合を小学校で教えることの是非が議論され, 批判的な論調の強さに, はかなくも消え去ってしまいましたが, 本書を読む(見る)と, 集合という概念は私たち人間にとってきわめて普通のことなのだということがわかります(数学者にとってはあたりまえのこと?). 「集合論」などと大袈裟に取り扱わないで, ものの見方・考え方の原点にある, 大切な概念だと捉えれば, 小学校の「数学」に, 意識的に取り入れることができるのではないのでしょうか. むしろ, もっと積極的に取り入れるべきではないかとさえ感じます.

他の章で扱われるテーマは, タイトルからもお判りでしょう.

改めて本書全体を読み返してみて, たとえば小学校から高校までの教師をめざす人たちに, ぜひ本書を読んでもらいたいと思いました. 使い方を工夫すれば, 自主ゼミや教科教育法で, 何か豊かな材料を提供してくれそうな気がするのです.

そしてまた, 多くの大人たちにとっても, 「はじめて」のことがたくさん見つかるのではないのでしょうか.